



# 私が幼児教育を志した頃(11)

津守 真

一九五一年、私は、六年前までは敵国だった国に留学し、戦争中は鬼畜と宣伝されていた米国人とも友人となり、米国人の方も、かつては残忍で野蛮と思っていた日本人を、同じ心情をもつ人間であることを知ってくれた。国と国との間で、相手の中傷する宣伝文句がどんなに人々を切り裂くことかをも、戦争を通して私共の時代は学んだ。私はこの戦後早い時代に米国に行き、家庭の一員として迎えられ、米国の家庭を内側から体験する機会を得た。その当時から、日本に帰ったら米国の家庭について本を書くことができると米国の友人たちに言われたものだった。それから五十年を経て



はじめて、私はこのことを書いている。私がお世話になった大部分の方々はすでに亡く、懐かしさにたえないのは人の常であるが、ここでは一九五〇年代初めの黄金時代の米国の家庭と人について、私が体験したままに記したいと思う。その後その人々とは繁く文通し、何度か再会し、私の壮年期を通して励ましてくれた人たちである。私の保育論の根底にはいつもその記憶が温かくあった。

### 最初の家庭―クラウンス家

パールハーバー（真珠湾）のことが話されたのは最初の晩だけで、翌朝からはクラウンス家での気持ちのよい毎日が始まった。

クラウンス老夫妻と私と三人で朝食を済ますと私は市電で大学に通う。私のメンター（指導世話役）である北川先生から、「米国人の家庭では家族皆がそろうまで食事をして待っているから、夕食に遅れるときにはかならず電話をするように。そういうことが信用につながる。米国人は一度信用すると、それは一生涯つづくから」と言われていた。この先長い間の米国人とのつきあいの中で私はそれが本当であることをためらわずに言うことができる。夕食後は、居間のソファに腰をおろして皆で歓談する。この最初の家では私の英語は特別に拙かったので、若いころ中学の英語の先生だったクラウンス夫人は私のために毎晩英語を教えてくれることになった。リー



ダーズ・ダイジェストや、ナショナルジオグラフィック、ライフなどの雑誌が主なテキストだったが、教養人の夫人は図書館から借りた書物を私によく見せてくれた。夫人は「aunt」という語は日本語で何というかと尋ね、私が「おばさん」と言うと、これから自分たちのことを「おばさん」「おじさん」と呼んでくれと言い、私はいつもそのように呼ぶことになった。夜はしばしば友人の老夫婦がトランプをしに来た。カナスタという簡単なトランプ遊びだった。おしゃべりをしながらトランプに興じるのが老夫婦の社交の楽しみだった。

クラウンス夫妻は、昔ながらの礼儀を守る古典的な人達だった。クラウンス家に泊まった二日目の夕食のときだった。スープを飲むときには、スープ皿の上に身を屈めるのではなくて、首を真つすぐに起こしたままスプーンを口の方に運びなさい、それが礼儀だと言われた。ナプキンは毎週一度洗濯し、私専用のデザインのナプキンリングがいつもテーブルに並べられた。翌朝は、コーヒーを飲むときには決して音をたてないようにと注意された。音をたてないで飲むと美味しさが半減すると私は思ったがじきに慣れた。

## ハリス先生

クラウンス家に行った次の日、私はスポンサーであるファースト・コングリゲー



シヨナル・チャーチのサイデイ牧師に連れられて大学に行った。児童研究所大学院で私の指導教官に決まっていたデール・B・ハリス先生も同じ教会であった。当時先生は四十代はじめで、児童研究所の所長になったばかりだった。秘書のメアリーは、ハリス先生は学生の間で一番人気のある教授だと教えてくれた。握手をするとすぐに、先生は友人の原子物理学者に言及し、彼は広島島の原子爆弾で良心を責められて神経を病んでいると話された。そして申し訳ないと私に謝られた。私はアメリカの学者にこういう人がいることに心を打たれた。大学での私の勉学のプランを話したのはその後だった。(ハリス先生はそれから十五年後にフルブライト教授としてお茶の水女子大学で半年間にわたって講義をされ、日本の学生のなかに多くの影響を残された。先生については後にまた述べることになる。)

### 古い同窓生

クラウンス夫妻は、いずれも一九〇〇年頃のミネソタ大学の卒業生である。クラウンス氏は工学部の機械科を、夫人は文学部の英文学科を卒業し、すでに七十歳を越えていた。あれから五十年を経て、私共がその年齢に達し、その年齢でよく敵国の青年を家族の一員として家庭に泊められたと尊敬の念をあらたにする。その昔、クラウンス氏が大学を出てすぐに、ノースダコタのスポケインという町に鉄道技師として就職



し、一年後にクラウンス夫人が同じ町の中学の英語の教師になって赴任した。クラウンス氏に言わせれば夫人が追いかけて来たのだし、夫人に言わせれば旦那が呼び寄せたのだそうである。白髪になっても、こう言い合っているのを見るのは気持ちがいい。

クラウンス氏は、前年、長らく経営していた玩具会社を売って引退した。家の地下室に仕事場があつて、旋盤、ドリルなど金工具をそろえ、一日閉じこもつて、船の模型、馬車の模型など、精巧な工作をするのが趣味だった。私がいたときには、地下室と一階の間の天井に穴をあけ、扇風機を箱に入れて冷房装置を工夫して取り付けた。クラウンス夫人は口やかましい几帳面な人で、一見尊大ぶつた感じすら他人に与えた。クラウンス氏は鷹揚だがきちんとした人だった。来客の応対など礼儀正しく隙を見せない。しかし家庭の中の雰囲気は、私が子どもの頃の我が家と大差はなかった。この頃は、アメリカ人男性の平均寿命は六十七歳で、日本では一九四七年に五十六歳だった。

### ミセス・ストロウブリッジ

クラウンス氏の家にはミセス・ストロウブリッジという八十五歳になる老婦人が同居していた。クラウンス夫人の実の姉である。耳が遠くて、補聴器をつけているが、



いまだに嬰籙として自分の部屋は図書でうずまわっている。歴史が好きで、地図を見ながら、古今東西の歴史の書物を読んでいる。私と知り合ってから、東洋の歴史を勉強し始めた。一八八五年に十九歳で結婚して、九カ月で夫に病死され、それ以来独身である。クラウンス夫人の話によると、夫に死に別れてから、その悲しみにうちひしがれて、しばらくワシントン州のケープフラッターリーに気晴らしのために転地していた。それから一年もたないうちに、姉妹の母親にも死なれてさんさんの数年だったと話された。それ以来六十年以上の月日を、夫の写真を自分の部屋に飾って眺め、妹夫婦の家に一緒に住んだ。

クラウンス家の皿洗いは数十年間ずっと、ミセス・ストロウブリッジの仕事になっていた。私がクラウンス家にいる間、皿洗いはミセス・ストロウブリッジと私の仕事になった。一時間も二時間もかけてゆっくりと皿洗いをしながら私はこの老婦人とおしゃべりをするのが楽しみだった。皿洗いを終わるとソファに座って、クラウンス夫人の英語のレッスンをかねたおしゃべりである。

### 映画会

クラウンス夫妻はよく映画を見に行った。黒沢明の「羅生門」や「美女と野獣」も私は米国で見た。



あるとき、いつもゆく教会で、子どものための映画会があった。その中に「我ら常に備えあり」というタイトルで、日米戦争の海上戦が出て来た。アメリカの潜水艦が日本の軍艦を撃沈する場面で、日本の飛行機を打ち落とす場面、艦砲射撃など、私は見ていて戦時中を思い出した。集まった子どもたちは六、十歳位の子ども二十人程だった。終わってから牧師さんが私の所にとんで来て、あらかじめ試写をしなかつたのでこんな映画を見せてしまった、全く手落ちだったと謝り、途中で何回やめようと思つたか分からないが、中止したらかえって子どもに妙な印象を与えるだろうと思つてつづけたのだと話して、戦争中の日米間の事を話し合つた。この牧師さんは、良心的兵役拒否者（コンシエンシヤス・オブジェクター）で、私は戦時中に米国ではこういう制度があつたことを知つた。

### クリスマスの贈り物

一九五一年十二月、クリスマススイーヴの晩、クラウンス夫妻の教会のキャンドルサービスには私は伴われた。さんさんと降る雪の中の小さな教会の尖塔は絵のように見えた。翌朝クリスマスの日には、クリスマスツリーの下に家族が集まってプレゼントを開ける。私が小さいころ、わが家でも同じことがあつて、何日も前からこの時を楽しみに待つた。この日はクラウンス家で、私にもプレゼントがあつた。おじさんから



●



●



●

卓上カレンダー、ケンタッキーにいる息子、娘から私にもイニシャルを刺繍したハンカチ、ミセス・ストロウブリッジから二ドル入りの封筒、夫妻から私に部屋靴、それから、五ドル紙幣五枚入りの封筒とカードがついていて、「これはあなたがアメリカの最善の物を買うためのお金です」と書いてあった。私は口もきけず茫然とした。夜は、クラウンス氏の弟夫婦と息子、独身の老婦人と総勢七人で、ダウンタウンの十六階のビルのレストランにターキーのクリスマスディナーを食べに行つた。漢字で書いた日本からの婚約者の手紙はよい話題になつた。

クリスマスが終わつた翌日の午後、「おばさん」に呼ばれた。昨夜「おじさん」と遅くまで話したが、プレゼントのお金のことと誤解しないようにと前置きして私に言われた。「アメリカは世界中の人にいろんなものを分けて来た。このお金はあなたが良いものを持ち帰るようにという意味だ。良い物の解釈について、もうひとつ違うふうに考えてみよう。アメリカの物質ばかりではなくて、アメリカは物質以外のものをもっているはずだ。君はそれを日本にもつて帰るのが一番良いお土産だ。このお金は君がそれができるようにその手段として使うのが一番良い。だからこれは君が自分のために使いなさい。ここで勉強するにはコーヒーも飲まなくてはならないし、本も買わなければならぬ。そういうことに使いなさい」と言われた。陽が西の空に沈み、向かいの家の窓が赤く光っていた。私はアメリカに来ていることを全身に感じ





た。

### 玄関の鍵

ある晩、私のミネアポリス滞在中の住宅の世話をして下さるトンプソン夫人の家からクラウンス家に帰る途中、玄関のドアの鍵とスーツケースの鍵と間違えて持って来たことに気が付いた。しまったと思ったが、家に帰ると玄関のドアに鍵がかかっていた。助かったと思って入ってきたら、私の部屋の前に今日「おばさん」が修繕してくれたコートと玄関のドアの鍵がおいてあった。鍵のことは何度も注意され、落とさないように、忘れないようにと言われていて、今日も出がけに鍵を持ったかと言われたばかりだったので、恥ずかしかった。翌朝、私は顔を合わせるのがこわかった。「おじさん」「おばさん」は、叱ることもなく、冗談まじりに私をたしなめられた。その頃は現代とは違って、日本の私の家では夜も玄関のドアに鍵をかけたことはなかった。

この家に一カ月滞在の後も、私はしばしばこの家を訪れた。いつも台所口から勝手に入り込み、ドアをあけて声をかけると「おやまあ、よく来ましたね、私の息子」と手を広げて迎えてくれる。ミセス・ストロウブリッジが、台所の手をとめて、台所用のゴム手袋をはずし、「おやおや、だれかと思っただらあなただったのか、お父さんは



元気が、お母さんは元気か。手紙はよく来るか」などと尋ねる。「夕飯ができるまで、居間で新聞か雑誌でも見ていなさい」と言われて、私はソファに腰を下ろして新聞を読み始めると、クラウンス氏が書斎からラジオをとめて出て来る。そして夕食が済むとミセス・ストロウブリッジが、自分は耳が遠いからあなたがたは話していなさい、今日は自分が皿洗いは全部やってあげるから、と言うので、私たちはよもやま話をする。クラウンス氏は機知に富む冗談をいい、夫人は、日本のいろいろのことを根掘り葉掘り尋ねる。半年ぐらい過ぎた後には、もうあなたもアメリカの生活習慣に慣れたから、キスをして良いだろうと言って私を抱擁した。

私が忘れることの出来ないことの一つは、ちょうど一九五二年の七月に大統領選挙演説で賑わっていたことだった。いつも政治のことなど話したことのないクラウンス氏がパイプをくわえて私に大統領の選挙演説のことなど尋ねた後に言った。アメリカにはいろいろ良いことも沢山ある。しかし政治家というのはいつの世にもくだらないものだ。政治家は自分の国に都合の良いことばかり考えて、外交政策を真剣に考えない。国内政策も同じことだ。豊富な天然資源をもつ広大なこの土地で、それを濫費し、林野を切り開き、材木をどんどん燃やし、石炭や石油を掘り尽くし、それを有益に使わない。これはアメリカ人の犯した最も大きな罪だ。そして政治家はこれを反省しようとしな。クラウンス氏はいつにない激しい語調で言った。



ずっと後のことになるが、一年九カ月のミネアポリス滞在の後に私がミネアポリスを出発のとき、自動車で駅まで送ってくれたのもこのクラウンス夫妻だった。別れ際に夫人はひとつの封筒を私のポケットに差し込んで言った。「これはただの手紙だ。決して途中で開かぬように。船に乗ったら開いて読みなさい」と涙をためて言った。

注 デール・B・ハリス、津守 真著 お茶の水女子大学家政学講座4 光生館 一九七一年